

お世話になった浜益で、果樹園を守っていきたい



井上 優太 (いのうえ ゆうた)

札幌市出身。2017年に北星学園大学経済学部を卒業後、農業関連団体を経て、2020年10月より浜益区地域おこし協力隊に着任。2021年4月からは地域活動として青年団体の事務局も務める。

【私のこれまで】

農業に関わる仕事がしたいと思ったきっかけは、小さい頃からの体験にあります。小学生の頃には、戦時体験給食として握り飯を食べ、郷土料理体験では松茸ご飯が出ることもありました。そのような学校における食育の取り組みを通じて、小さい頃から食べることが好きになり、また、料理の裏側には食材を生産する農家がいることを漠然と感じていました。

そのため、大学入学後も、飲食店の調理や農家のお手伝いのアルバイトに取り組みました。学業の傍ら週に4日ほど、寿司屋で働き、生鮮品の廃棄量の多さに驚きました。また、農家のお手伝いのアルバイトでは、有機農業での雑草の処理や芋の収穫作業に取り組みました。これまで体力・筋力には自信があったのですが、農業の力仕事の過酷さの前に、その自信はもろくも崩れ去りました。

しかしその一方で、食や農業には豊かな生活を支え

ることができるという魅力があると思います。食や農業を支える仕事がしたいと思い、農業界で働いてきました。

【浜益移住のきっかけ】

2020年の6～7月、浜益に滞在して農繁期の収穫や摘果^{*1}作業に参加するNPO法人ezorock（以下、「ezorock」と表記）の「果樹園お手伝いプログラム」に参加したことが移住のきっかけです。活動や滞在、地域の方々との交流を通じて、浜益に愛着が湧いてきて、「浜益に住んだらきっと楽しい」と感じました。

毎日のように作業に参加していたこともあって、たまに作業をお休みした日には、一緒に作業をしていたアルバイトの方に「今日ゆうたは来ないの？」と言ってもらうこともありました。また、作業では私の背が高いということで、高いところの果樹の摘果や収穫では、地域の方から頼ってもらうこともあります。役に立ったような気がしました。こういう嬉しいことの積み重ねが、地域への愛着に少しずつ変わっていったと思います。

「協力隊になりたい」というよりは自分が好きになった「浜益に住みたい」という感じです。元々農業に関わる仕事をしたいという気持ちもあり、協力隊の募集をしていた時期だったので、応募を決めました。



リンゴ収穫

* 1 摘果

果実の小さいうちに間引くこと。果実を収穫するためと、なり過ぎによる樹勢の衰えを避けるために行う。

【これまでの活動】

主に2つのテーマで活動に取り組んでいます。1つ目は、果樹生産技術の継承です。後継者のいない果樹園で生産のサポートをしながら、日々技術を学んでいます。具体的には、冬期間の園内の雪下ろしや果樹の剪定^{*2}に始まり、春の摘果や夏から秋にかけての収穫など果樹の生産に年間をとおして取り組んでいます。実際に、10m以上もある木に登って作業したり、5年、10年先をイメージして木を切ったりと剪定ひとつとっても大変なことが多かったです。しかし、その作業一つ一つの積み重ねで作物はできています。自分が関わった果物が実をならせ、「美味しいかった」と感じてもらうことがやりがいです。

昨年の7月には道の駅石狩「あいの郷厚田」でさくらんぼの販売・PRイベントを企画し、2日間で約210食を販売しました。区内の3果樹園と連携し、浜益を訪れたことがない来訪者に対し、品種や農園ごとの特徴を伝えることで、果樹園や浜益に関心を持ってもらうきっかけになったと思います。普段から果樹生産に関わる強みを活かし、販売面や果樹園の価値向上・食品ロス削減にも取り組んでいきたいです。

次に、関係人口（地域ファン、リピーター）創出の取り組みです。札幌市近郊に住む都市部の若者の滞在受入やコーディネートに取り組んでいます。

ezorockのメンバーは週末になると浜益に滞在しながら、果樹・稲作農家のお手伝い等に取り組み、今年



サクランボ販売PRイベント

* 2 剪定

樹木の生育や結実を調整したり、樹形をととのえたりするため、枝の一部を切り取る。

度からは浜益版「集落の教科書」の制作を目指して活動しています。集落の教科書とは、「いいことも そうでないことも ちゃんと伝えたい」をコンセプトにした移住者向けガイドブックです。浜益ではこれを関係人口向けにアレンジして制作しています。

私自身は、地域でのインタビュー調査の調整や現場対応、活動の事前作り込みのコーディネートまで幅広く担当しています。私が好きになった浜益を都市部の若者が知り、共感することでまた来てくれることが何より嬉しいです。関係人口を創出することで、浜益の持続性の維持・向上に寄与していきたいです。

【今後の展望】

今後もこの取り組みの延長線上で、浜益の関係人口を増やしつつ、将来的には果樹園を継ぎたいと考えています。着任してからの1年は継続的に果樹園の作業に取り組み、関わりを持てば持つほど、自分の中で思い入れが増しているように思います。

また、果樹園では協力隊と受入先というものを越えて、家族のように関わってくれているように感じます。そのように大切にしてもらっているので、この土地で果樹園を守っていきたいと思います。就農には高いハードルがあると思うので、不安も多くありますが、前向きに一歩ずつ進めていきたいです。



収穫前のりんご